

知 能 の 診 断

(下)

村 山 貞 雄

9 知能検査の形式と信頼度

知能検査で幼児の知能程度を診断したばあい、どれぐらい信頼度があるだろうか。

現在、或る人は相当高く評価するが、そうかと思つと、きわめて低くみる人人もいる。

知能検査の信頼度について考えるばあい、まず考えられることは、知能検査の形式にかんする問題である。

知能検査の形式にかんするおま問題として、個人検査と団体検査の信頼度の問題と、

第一表 団体検査と個人検査の相関

比較された個人検査	相関係数 (r)	備 考
WISC知能診断検査法	.64	東京都幼稚園5.6才
鈴木ビネー式知能検査法(仮称)	.37	東京都幼稚園5.6才
田中ビネー式知能検査法	.72	東京都幼稚園5.6才
点数式田中個別知能検査法	.39	東京都幼稚園5.6才
乳幼児精神発達検査	.46	東京都幼稚園5.6才

(注)調査人員はすべて 30 人ずつである。

すべて東京都内の幼稚園 56 歳児におこなつた。

作業検査と言語検査の信頼度の問題があるが、今回は前者について述べよう。

A 団体知能検査と個人知能検査の相関

団体検査の一例として、村山式幼児用知能検査をとり上げて、幼児の団体検査と個人検査の相関関係をしらべたところ、第一表のようであつた。

この結果だけによれば、両者の相関はあまり高くない。

B 幼児に団体知能検査をおこなうことの可否

— 幼児に団体検査をおこなうことは、数年前までは考えられないことであつた。現在でも幼児にたいして団体検査は無理であると主張する人が少なくない。たとえば、ある保育の教科書では、幼児の団体検査をまったく否定している。

— 幼児に団体検査をおこなうことが無理であるかどうかをしらべる一助として、十人の臨床心理学者に、つぎの三項目についてたずね、三つのうちのいずれかに解答を依頼したところ、第二表のような結果を得た。

— 団体検査を幼児におこなうことが無理であるとすれば、その原因をみるために、すなわ

第二表 団体検査の可否

項 目		人数
一、幼児に団体知能検査をおこなうことは無理である	二、幼児に団体知能検査をおこなうことは無理でない	五名
三、その他		三名
		二名

ち、幼児におこなった団体検査の信頼度が低い原因をみるために、昭和二十八年に現行団体検査について調査したところ、つぎの内容が考えられた。

- 一、幼児が友達の答をカンニングする。また、逆に答を友達に教えてやる。
- 二、団体的にやる一斉作業にのらない子どもがいる。
- 三、幼児期と小学校低学年と併用できるようになった検査には、幼児に無理な内容や方法のものが多く。
- 四、作業が幼児にとって困難なものがある。
- 五、例(練習問題)をあげて、他もこれと同様にやりなさいといっても、例とそれらの問題の関係がわからない。
- 六、一対一であったら励まして続行させら

れるような問題でも、団体検査では忍耐心のない者はやめてしまう。

七、幼児の知識の内容がせまいので、一部の幼児には分らないような絵がでてくる。

八、優秀な子どもでも時間制限検査にはまったかからない子どもがいる。

九、むずかしい問題の中には、児童期の常識を必要とするものがある。

そこで、筆者は、これらの欠点を克服するような団体検査ができないかということを考えて、一つの知能検査をつくってみたが、その短所や長所については、今後の調査にまつところが大きい。「幼児の教育」昭和三十年保育学会大会特集号、峯文閣発行「村山式幼児用知能検査」(参照)

C 幼児用団体検査による知能値の低下

団体検査でつぎに問題になるのは、幼児は団体検査をすると損をするのではないかということである。

団体検査は団体的な施行法によって標準化されているのであるから、この心配は一応杞憂であるといえよう。

しかし、団体検査はつねに同人数の団体に

たいしておこなうものではなく、生活年齢や子どもの性格・能力によって、人数を多少加減するのが普通であるから、このことから団体的に損をするということが実際おこってくる。

ところで、このように人数を加減する目的は、もしつねに同人数で検査をすれば正確な知能値をだすことが不可能なおこるので、できるだけ個人検査の結果に近い知能値をだすためである。ゆえに、団体知能検査は、団体的な施行によるハンディキャップをできるだけ少なくしつつ、多くの人に検査をしようという立場に立っていることになる。

すなわち、標準化は団体的におこなわれているから、平均値からみれば平等であるといえるが、個人的には多少の損をする人もであるという事実を頭にいれて、しかも、このような事実をできるだけ防止しようとしているわけであり、団体知能検査によって一般的に知能値が低くなるということはないが、知能値が低くなる子どもがあるといえる。

それでは、団体検査によって、知能値が低くでやすい幼児は、どのような幼児であろうか。

第七表 施行時間と知能指数

Aグループ	第一回 午前	第二回 午後	差
A	109	115	+ 6
B	117	139	+22
C	107	123	+16
D	117	122	+ 5
E	122	117	- 5
F	118	110	- 8
G	123	124	+ 1
H	117	108	- 9
I	148	148	0
J	107	105	- 2
平均	118.5	121.1	+2.6

Bグループ	第一回 午前	第二回 午前	差
A	112	119	+ 7
B	88	87	- 1
C	116	119	+ 3
D	152	154	+ 2
E	113	111	- 2
F	122	125	+ 3
G	104	101	- 3
H	116	107	- 9
I	118	120	+ 2
J	105	110	+ 5
平均	114.6	115.3	+0.7

(鈴木ビネー式)をおこなってみた。すなわち、このうち十人(Aグループ)は、午前九時から十時までのあいだに第一回目の検査をおこない、それから十日後の午後三時から四時までのあいだに第二回目の検査をおこなった。その他の十人(Bグループ)は、第一回

約二にすぎなかった。しかし、実際には、幼児が午後幼稚園から帰った後や帰る途中に来て検査したばあいには、疲れている様子がみえ、検査をしながら、このために知能値がさがって出るのではないかと心配されることがしばしばおこつて

目の検査を午後二時から三時までのあいだにおこない、第二回目の検査をそれから十日後の午前九時から十時までのあいだにおこなった。(すべて鈴木ビネー式検査を用いた)

いる。特に三歳台児には午後の検査でさがる者がめだつた。なお、午後にテスト問題を放棄しようとする態度の強い子どもは、午前来たときも、やっぱりそのような態度がうかがわれるが、励ましてやるとやってくる子どもが多い。この

ように、午前では明瞭にあらわれぬ欠点が午後にはあらわれることがあり、或る種の子どもには、時間的なハンディキャップが考えられる。

B 検査室で幼児に知能検査をおこなう問題
検査の施行条件で問題になるものに、一日における時刻の問題とともに、場所の問題がある。

すなわち、母親のなかには「そんなことができなかつたのですか。うちではよく言えるのに」とか、「家ではするのですが、よそではないのですよ」などということをいう者がある。

これらの言葉は、筆者をはじめのうちは母親の偏見のように思っていたが、母親がこのように言った五人の幼児について実際にしらべてみたところ、そのほとんどが事実であつた。

このことについて調べる補助手段として、母親にたいして日本保育学会式幼児発達検査の知的発達の問題をわたして、幼児の家庭の状況について解答をもらった後、知能検査(鈴木ビネー式)をおこなった。

その結果、両者の相関係数 r は 0.57 で

第九表 家庭生活の観察と知能検査
(出生順位)

出生順位	人数	家庭生活の観察 — 知能検査
一番目	13	-1.07
二番目	17	+9.47
三番目	10	-5.20
四番目	2	+8.50

なお、この調査で、母親の学歴について調べたところ、第八表のようになり、小学校を出ただけの母親は、人数はわず

第八表 家庭生活の観察と知能検査
(母親の学歴)

母親の学歴	人数	家庭生活の観察 — 知能検査
小学校	3	-5.00
女子校	27	+6.00
専門学校	8	+5.88
大学	8	-2.88

かった。日本保育学会の検査は、かららずしも知能のみをみようとするものでなく、知識や常識を相当含んでいるから、この調査の結果の解釈はやや複雑であるが、勝手な行動をする幼児、気の散りやすい幼児、あきやすい幼児などが、母親による幼児の家庭生活の観察の結果よりも、検査室におけるテストの結果が低くでていた。

かであったが、検査の結果よりも子どもをよくみる傾向がうかがわれた。(また大学を出た母親にもおなじ傾向があらわれたが、これは、幼児が家庭における教育や文化財にめぐまれて知識や常識が発達していることも一つの原因であろう。母親の理想が高いことも一つの原因かもしれない。)

また、同胞中の順位をしらべたが、有意差はなかった。(第九表参照)

(筆者は愛育研究所員)

保 育 (新刊紹介)

子供はどのように成長していくか、又どのように育てていかなければならないか、

子供は一人一人にそれぞれ素質や環境による個人差があり、またこれと同時に子供と一緒に遊ぶ大人、子供を指導する大人にも又、それぞれの考え方、やり方があり、持ち味がある。

いかなる場合にいかなる指導方法をとったらよいか、どのような子供にはどのような考え方をしたらよいか、

等に、問題は千差万別である。

これら多くの課題を前にして、長い間の貴重な体験から著者は子供の代弁者として、大人の良心に何を訴えようとしているのだろうか。

本書を通読し、その特徴ともいえる「幼児教育の現場にある者として必要な予備知識、例えば幼児の身体的発育の状態や精神的発達の状態を、指導の実際的な面と関連づけた所」ここに本書の価値を見出す、最後に最も心に残るもの。

それは、本書の全面に、活字の一つ一つに著者の人間味豊かな温かく、大きく、広く深い「愛」の溢れていることである。

書 名 保 育

著 者 お茶の水女大教授 同附

属幼稚園長
及川 ふみ

A5判 上製二一〇頁三二〇円

発行所 光 生 館